

# 障害のある人が働くことを通して 社会に参加する道を拓く

高知県●特定非営利活動法人 ワークスみらい高知

高知市内に食品工場と直売店、喫茶店、レストランなど6つの事業所をもち、障害のある人の就労支援を行う「ワークスみらい高知」は、「社会の一員としての義務を果たし、当たり前前に生活する障害者を社会に送り出すこと」を目標に活動をすすめている。福祉の世界では型破りともみえるワークスみらい高知の活動は着実に地域社会に根づきつつある。理事長の竹村利道（たけむら ともみち）さんに話をうかがった。

## 甘味茶寮「さくらさく」

「いらっしやいませ」。元気な声がお客さんを迎える。店に入るとすぐに色とりどりのケーキが並んだショーケース。その奥に明るく落ち着いた雰囲気のレストランスペースが広がる。教組のお客さんがにぎやかにおしゃべりしている。近くの主婦の方たちのような。厨房と客席の間を行き来するスタッフは、かなり折り目正しく見える。

高知市郊外、国道56号線バイパス「土佐道路」に面した甘味茶寮

「さくらさく」。お茶とケーキ、和の食事を提供する店である。

さくらさくは、ワークスみらい高知（以下、ワークスみらい）が2010年6月にオープンした最も新しい事業所だ。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という言い伝えがある。ワークスみらいの理事長・竹村利道さんは「そう思い込まされてきたが、実際には桜を切

ってはいけないということはない。かえってそのほうが成長を促すことだってある。福祉の世界もこの言い伝えのように、常識としてまかり通っているとならえ方のままだに障害者の可能性を閉ざしていい」と考え、桜を切る馬鹿になりたいとこの店に桜を冠した名前をつけたのだという。

## 保護よりも機会を

さくらさくは障害者自立支援

法による就労継続支援事業（A型）の事業所である。10人の精神障害・知的障害のある人たちが働いている。しかし、店のどこにもそのことを知らせるようなものはない。それはいわゆる「作業所」ではなく、地域の人々に手頃な値段でおいしいものを提供する普通のお店にしたからだ。「福祉」という壁を外し、店もそこで働く人も地域社会に受け入れられる。また、障害のある人たちが、自らの職場として誇りをもって働くことができる。さくらさくはまさに、そういう場所なのである。

そこで働くひとり、精神障害のあるA子さんは、福祉作業所にいたが、3年前からワークスみらいで働くようになった。はじめは3時間だった労働時間も今ではフルタイムになり、接客からレジまでこなすようになった。お客さんに接する姿は自信にあふれている。

竹村さんは言う。「A子さんの



甘味茶寮「さくらさく」の内部

障害自体は今でも変わっていないけれど、自分も働くことができるという自信が生まれたから胸を張って働いている。自分から変わって行くのです。障害者は長い間「できない」と思い込まされてきました。それはこれまでの「できないから保護する」という福祉の視点によってもたらされたものだと思います。もちろんやりたくてもできない人もいますが、何かしら

できることはあるはずですよ。「できない」ではなく、「できるかもしれない」という視点が重要で、そこを發揮させるためにどうするか。それが僕ら福祉に携わる者の責任だと思うのです」。

「Not Charity But The Chance」  
（保護より機会を）。これがワークスみらいのモットーである。

### 地域企業との連携が成功の鍵

社会福祉協議会に勤めていた竹村さんは、2003年障害のある人の就労支援のための「ワークスみらい高知」を立ち上げた。あくる年には、食品工場をつくった。

「私は福祉うんぬんじゃなく、一般雇用で障害者を雇い働いてもらう会社をつくらうと思ったのです。でも、これが大失敗でした」。なげなしの資金をつぎ込んだ会社は1か月目から200万円の赤字。商売にはまったくの素人だった竹村さんはこの事業で3000

万円の赤字を出した。

「それでやっと地に足がついたのです。商売というのは、いろいろな仕組みのなかで学ばなければならぬことが山ほどあることがわかりましたし、福祉の世界の感覚では世の中に通用しないということもわかりました。そのことを3000万円の授業料を払って学ばせてもらったと思っています」。

障害のある人の仕事をつくるべく、いくつかには、一般企業と対等の立場で手を組んでいくことが必要だと考えた竹村さんは、商工会議所や地域の会社を回り、自分の考えを聞いてもらった。そのことによって多くの企業とのネットワークが生まれた。

「従来の福祉と企業との関係というのは、福祉のほうから協力を訴え、それに企業がチャリティとして応えるというものだった。ですから、企業にとってはビジネス外のもので、いわばその時だけの

関係にすぎません。障害者の就労支援といっても、そこからは本当に生活できる賃金を生み出すような仕事をつくることは難しいのです。企業にとってもチャンスとなる関係をビジネスとして成り立たせることによって利潤をあげ、雇用した人に生活できるだけの給料を支払うことができる。そういうものにしたかったのです」。

### 福祉を前面に出さないサービス

ワークスみらいの事業を再スタートするにあたって、竹村さんは、①障害者や福祉を言い訳にしない、②一般の人を対象に、品質とサービスを提供する、③給与を高知県の最低賃金以上にする、等を基本軸に据えた。

食品工場「Em's Factory」（エムズファクトリー）での食品加工と製麺、さらにそれをベースに弁当を販売する「Em's Kitchen」（エムズキッチン）、カフェレストラン



さくらさく。のケーキ売場

## 「できるかもしれない」という期待感を大切に

「This place (エムズブレイス)」、和洋菓子製造工場とカフェ「STRAWBERRY FIELDS (ストロベリーフィールズ)」、そして前述のさくらさく。と事業は広がった。このほか、工場や店舗での立ち仕事に難しい身体障害のある人を中心にパソコン業務を行う「ICTセンターみらい」も設けられている。これらの事業所で雇用されている障害のある人(利用者)は120人。このうち50人以上に県の最低賃金額以上の給与が支給されている。グループ全体の売り上げは年間4億円に達する。

「中国に『飢えた人に一匹の魚を与えればその日の糧となる。しかし、その人に魚の釣り方を教えれば、一生飢えることはなくなる』ということわざがあります。ただ食べ物を与えるのではなく、釣りを教えること、そのチャンスをつくることが重要だと思います。『やってみようよ』と関わってあげば、できることは増えると実感しています。私たちはがんばればできると思いません。でも『できる』とは思っています。でも『できる』かもしれない」という期待感もち環境を整えることが『できる』につながっていくのだと思います」

なお、これらの事業所には福祉職のスタッフは配置していない。福祉職のスタッフだと障害のある人のことがわかりすぎていて、どうしても援助の手を差し伸

べてしまいがち。かえって働くこととの支障になってしまふ。さくらさく。の指導員は元ホテルマンだ。

「店内で、お客さんたちの会話が聞こえてくるんですよ。『ここって、安くておいしいやろ。障害のある人がやりよる施設らしいでえ』って。『ええよねえ。おいしいし、がんばってやってるし』。自然に受け入れられる強みというのを実感して、ものすごくうれしかったです」。

## 働くこと、生活することを支える

ワークスみらいの利用者の生活やメンタル面などを支援するのが「相談支援センターE.M.I.E.」である。こちらは、福祉職が担当する。生活相談員が職場を回って、「しんどいことはない?」「もう少し目標をあげてみようか」と個別の状態を把握して相談にのる。また、そろそろ親元を出たいという人の

相談にのったり、家族との調整を図ったり、住む場所を探すなど、生活全般の支援をしている。

親元から離れて暮らしたいという人は確実に増えているという。グループホームも3つあり、16人が生活している。しかし、グループホームでの生活は、助走にすぎないと言う。時々サポートを受けながらもひとり暮らしができるようになることが目標であり、スタッフの支援を受けながら共同生活を営むグループホームはあくまでもその助走期間だ。

「働く場所と住むところをつくるのが僕らのゴールではないのです。いかにして社会に出していくかということが重要なのです。一般企業で給料をもらって、地域で生活する。そうやってこそ、本当の意味での社会参加と言えるのではないかと思うのです」。

ワークスみらいからは、毎年15人ほどが一般企業に就職していく。

## ゆくゆくは福祉施設自体が 必要ない社会にしたい

特定非営利活動法人ワークスみらい高知理事長 竹村利道さん

福祉系の大学を出て病院に勤務。その間、病院を退院した人が再入院してくるケースが多いことに疑問を感じ、退院した人が生活できる地域が必要と、3年後社会福祉協議会に転職した。だが、そこでも仕事に対する葛藤が生まれた。特に「障害者が働くことができず、作業所や施設で月に5千円とか1万円とかもらって軽作業をしていることが事実として定着している」ことに納得がいかなかったという。40歳（不惑）の時「いつまでも惑っているわけにはいかない」と自分の考えを実行するためにNPO法人をつくった。

「国民には納税、勤労、教育の義務があるのだから、働ける人はやっぱり働いて、税金を納めるということをあきらめちゃいけないと思うのです」。そのような障害のある人の自立を支援するシステムこそが障害者自立支援法の本質だと思う。

「ゆくゆくは福祉施設自体がなくなるべきだと思っていますから、就労支援も今のようにまとまって働くかたちでなく、



座右の銘は「事実が真実の敵なり」

一般の雇用がどんどんすすむようにしなければならぬ。うちも障害者の施設でなく、普通の店で障害者がいるというスタイルになっていけばいいと思っています」。

働く障害者が当たり前になる  
社会をめざして

「例えば、1事業所に20人の障害のある人と6人の障害のない人が働いているというのは、世の中のバランスとしてはおかしいです。どこにいても、10人のなか

に障害者が1人は働いているという社会がつくられるべきだと思うのです。テレビのアナウンサーが車いすで司会をしていたり、銀行の窓口で車いすの人がいたり、一軒所懸命ホテルでベッドメイキングをしている人が精神障害や知的障害のある人だったり、そんな光景

が普通という社会が自然に広がっていけばと思うのですが、私が生きていく間は難しいでしょうか。期間もなく高知県の産業振興計画の二環として「土佐茶」の販売促進のためのカフェが高知市の中心市街地に開設される。そこはワークスみらいの利用者の働く場でも

ある。また、古い倉庫群を活用した障害のある人の美術館（アールブリュット）を中心とした観光エリアづくりの計画もすすんでいる。「障害者の働く場が増えることはうれしいことです。特にうれいのは福祉施策でないことに障害者の力を貸してほしいと言われることなのです。そういう時代がきたのですね」。

ワークスみらいは一つひとつ事実を積み重ねてきた。その事実は大きい。しかし、大切なことは事実をもとに、真実にどれだけ近づけていけるかと竹村さんは言う。どこまでもゴールはない。

**特定非営利活動法人  
ワークスみらい高知 概要**  
事務所所在地：高知県高知市梅ノ辻9-9  
TEL：088-879-0346  
ホームページ：http://www.worksmirai.com/